ISSN 0386－4790
第21号　国文学研究資料館報　昭和58年10月

国文学研究資料館報
第21号
昭和58年10月

国文学研究資料館における情報処理の現状と展望

内藤　衛亮

当館の情報処理あるいはシステム開発については創設以来鋭意努力されてきたが、昭和51年度に電子計算機が導入され、一層本格化して今日に至っている。今年度は計算機の入れ替えがあり、またシステム開発も古典籍総合目録システムを中心に大きい変貌をとげようとしている。そこで計算機の更新、最近のシステム開発とデータ整備の状況、館内サービスの計画案、そして将来的課題等を概略報告する。

次期計算機選定

次期計算機選定については、昭和57年度後半に、電算機専門委員会（準備会）を中心に編成した機種検討会を数次にわたり開催し、情報検索委員会の議を経て、プロポーザル要求に応じた日本ＩＢＭ、富士通、日立三社から日立製作所ＨＩＴＡＣ／Ｍ２６０Ｄを選定した。新しい計算機の機器構成を表１に、新旧の比較を表２に、端末配布計画を表３に示す。

ハードウェアの搬入は昭和58年10月末日を目途に移行作業を進めている。直結型端末25台は、漢字キーボードの付くもの７台、その他は『かな漢字変換』により全て漢字入力が可能である。この他に画像入力用端末１台（５６０／２０Ⅲマルチワーク・ステーション）を情報処理室に設置する。５６０／２０ⅢＰは、「パーソナル・ステーション」という商品名の端末で、フロッピー・ディスク、プリンタを装備しており、『かな漢字変換』により漢字入力が可能で、単票プリントができ計算機室が稼動中でなくとも使用できる。なお直結型端末の他に、日立漢字データ・ターミナルＨＴ５２１７（ＪＩＳ第二水準装備）３台、ベーシック・マスター（ＢＭ１６０００）２台を導入する。この他に、既に導入されている端末類４台（サンヨー・ポータブル型、テキサス・インストルメント、アンリツ、ＦＭ１１）があり、合計９台の（公衆網）回線経由で利用する端末がある。

開発

昭和57年度以来の開発の内、主要なものは次の通りである。

１　古典籍総合目録作成システムの概要設計と入力部作成

昭和58年１月～３月にかけて㈱ラディックスに委託して概要設計及び入力部システムの設計と開発を行った。概要設計は古典籍総合目録データベースの概念設計と論理ファイル設計が中心である。システム機能は概要のみを設計したが、ファイル設計はリレーショナル・モデルを採用した場合の物理ファイル設計レベルまで一応の案を示している。物理ファイル設計は今後の機能設計の詳細検討とＤＢＭＳの仕様とを待って細部の検討に入る予定である。概要設計に基き、書誌ファイル入力機能の内データベースに直接関連しない部分である帳票のシンタックス・チェック、セマンティク・チェック及びフォーマット変換機能等の詳細設計とプログラム開発を行った。これを受けて昭和58年度前半には古典籍総合目録の入力作業手順の確立としてその運用システム確立を計った。外注パンチによる作業形態と多人数による作業の同時分担を考慮し、入力データのロット管理という概念を導入して運用システムを構築した。ロット管理テーブルを中心として幾つかのＴＳＳコマンドで作業が進められるようになっている。

昭和58年には古典籍総合目録作成システムのＤＢＭＳ上への設置展開

一目　次一

国文学研究資料館における情報処理の現状と展望……内藤衛亮…1
古典テキストデータ用データベースシステムの開発について…星野雅英…5
英米の図書館機械化をめぐって　宮澤彰…7
評議員・委員・調査員・人事異動……8
インディアナ大学源氏物語研究集会参加記……伊井春樹…10
文献資料部事業報告……福田秀一…10
研究情報部事業報告……棚町知弥…12
整理閲覧部事業報告……本田康雄…12
利用者へのお知らせ……15
昭和五十八年度秋季学会開催一覧……16

を行う。開発内容は次のようなものとなる予定である。○物理ファイル設計の確定。○書誌データ・ローダの設計開発。○著作、著者等ファイルの入力機能の詳細設計。○著作典拠、著者典拠等の業務に必要な機能の詳細設計。○上記機能を実行するプログラム群の設計・開発。

古典籍総合目録システムは、近い将来、マイクロ資料目録と和古書目録のシステムとデータベースを吸収統合化し、オンライン利用により運用を緊密化する予定である。

2　論文目録検索システム開発

当館では『国文学年鑑』と並行する形で、『三十七年以前論文目録（仮称）』の編集発行を急いでおり、さらにこれらと並行して論文目録検索システムを開発している。

論文検索システムの実験公開（科研費）を、メーカ提供の情報検索システムORIONに当館発行の『国文学年鑑』昭和52年度版1年分のデータを搭載して、当館十周年記念式典（昭和57年10月29日）と国際日本文学研究集会（同11月12日）に、館内において行い、デモンストレーションの必要性、方法論などに多くの示唆を得た。

さらに論文検索システムの公衆網利用による遠隔利用テスト（科研費）として、前記データにより東北大学、宮城学院女子大学（昭和57年10月29日）、九州大学（九州各地の研究者）（昭和58年3月18日）においてサンヨー・ポータブル漢字端末により行った。この実験は、特にJIS第二水準ならびに外字の出力のできない場合の利用者の反応、その範囲でのデータに対する信頼感に着目して行い、二箇所とも熱心な協力を得た。データに対する期待は少なからぬものがあったので、JIS第二水準、そして将来的には外字の出力に対する解決策を摸索すべきであるという教訓を得た。

論文検索システムORIONには昭和56年度に利用者・オウンコーディングを付加し、初心者にとって使い易いインターフェースを加え改良したが、昭和57年度には問題となった点をふまえて、さらに使い易いものとするための改良を行った。

3　論文目録データのオンライン・データベース用整備

37年以前分　約3万4千件
38～47年分　約4万6千件
48～55年分　約4万4千件
合計約12万4千件を、昭和58年度中にはオンライン検索可能とするべ

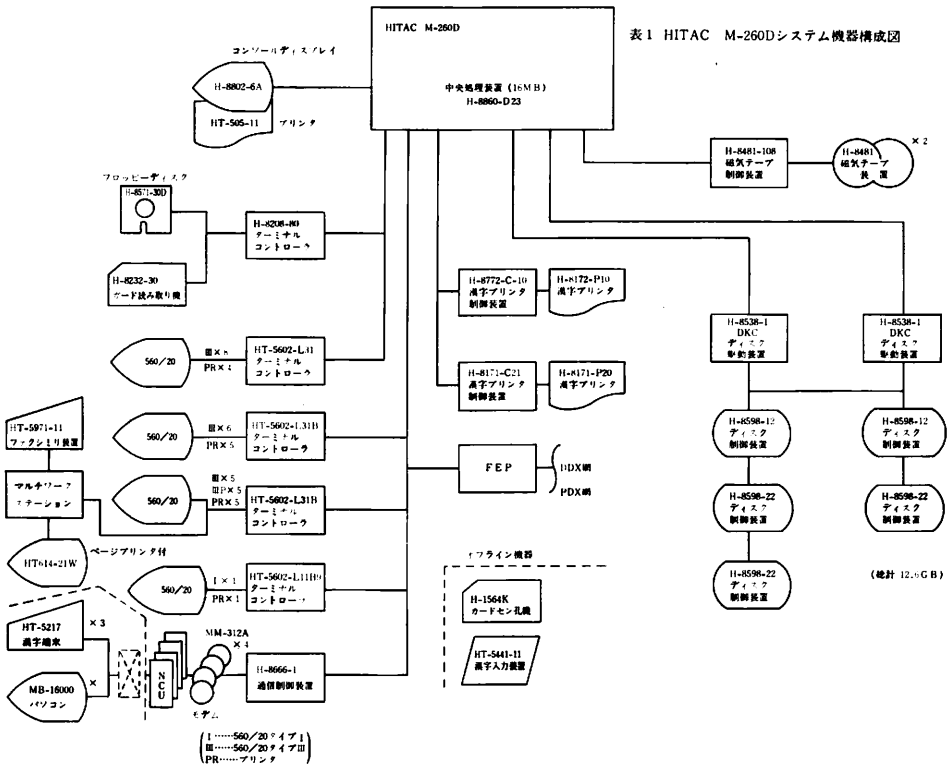


表1　HITAC　M-260Dシステム機器構成図

く作業を急いでいる。ついでながら、データ内容はオンライン検索を主目的としたものの、前記『三十七年以前論文目録(仮称)』とは必ずしも軌を一とするものではなく、後述するように、システム開発の今後の課題となっている。

4　共同研究『連歌』のシステム設計ならびに入力部プログラム開発

共同研究『連歌』は昭和57年度に発足し、これに情報処理室は全面的な支援体制で取り組んでいる。システム分析と開発、データ作成の各側面において連歌データと当館書誌データの結合までを可能とすべく共同研究『連歌』のメンバーと検討協議している。昭和58年度中には入力部の開発に着手の予定である。

共同研究への支援の在り方、メンバーとの検討協議体制そして新規開発の進め方等は、将来的展望、定常化を含めて情報処理室にとっては新しい側面の課題である。

5　索引作成(本文・語彙検索)システムの実用化

国文学研究における計算機利用は当館創設以来の課題であり、その一例として本文分析手段の開発に取り組んでおり、昭和57年度に至り「索引作成システム」として一先ず完成した。索引作成システムは、次の3サブシステムからなる。

「索引作成システムI」入門レベルの利用者を対象とする。端末から自分でテスト的、小量のデータを入力して索引を作成するもので個人的に短い文章や小量の和歌などの索引作成に適する。『文脈付索引』『総索引』『頻度索引』等を出力する。版下作成、大量データにも向くように改良中である。

「索引作成システムII」右記を使いこなした利用者を対象とする。版下作成可能。対話形式でオーダー・メード的な索引を作成するもので『総索引』『(和歌等の)各句索引』『名詞索引』ならびに『人物名索引』等工夫次第で様々の索引を作成できる。

「全文検索システム」検索に少し慣れた利用者を対象とする。当館で用意したテキスト全てを利用できる。語(実はその読みや表記)を指定して、テキスト中での頻度を知る、語を含む文(和歌など)を表示する、前の文、後の文など次々に表示する、等ができる、言わば「テキストを読む」システムである。

電算機専門委員会(準備会)

電算機専門委員会の設立は、当館のシステム開発の将来計画や運用の現況から近年その必要を指摘されていたが、昭和57年度に至りまず準備会として発足するはこびとなった。初年度における活動は、合計11回にも及ぶ集中的かつ精力的な内容となっており、主に設立準備と委員会規定案の審議、活動分野と責任範囲の定義、文字セット関係、古典籍総合目録作成システム、索引作成システムなどの開発計画・運用体制等の審議に多くの努力をはらった。さらに年度末に至り、機種更新について、特別編成の機種検討会を中核に鋭意かつ慎重な検討の結果、上首尾の成果をみた。委員会規定の審議制定には慎重を期して昭和58年度以降の課題とすることとなった。

システム説明会の開催

古典籍総合目録システム57年度開発分の解説を、予想される利用者である整理閲覧部を中心に約25名の参加を得て、「システム説明会」として昭和58年4月19日に行った。2時間にわたり『概要設計の概要』『入力システムの概要』『開発段階』の3部構成で説明し、館内関係者に対するパブリシティとして一定の効果を挙げたものと考えている。

サービス体制の整備

昭和58年11月以降には端末が34台

表2　ハードウェア新旧対照

	新	旧	新旧比較
名称	HITAC M260D	HITAC M160II	
主記憶装置 演算速度	16メガバイト(*) 4.3MIPS(+)	4メガバイト 0.5MIPS	4倍 約8倍
外部記憶装置容量	ディスク12.6ギガバイト(**)	ディスク 2ギガバイト	約6倍
直結型端末(#)	計 25台 560/20III P 6台 560/20III 18台 560/20I(閲覧室)1台	計 10台 560/20III 4台 9415(閲覧室) 1台 9415 4台 9915(漢字入力) 1台	2.5倍
プリンタ	8172(漢字ラインプリンタ) 8171(漢字カット紙)	8172(漢字ラインプリンタ) 8195(漢字カット紙)	
通信制御装置 モデム・網制御装置	公衆網4回線以上 1回線(2回線を予定)	公衆網2回線 1回線	

*　メガバイト：百万バイト、カナやアルファベットで百万字分。ギガバイト：十億バイト従って外部記憶装置(ディスク)の12.6ギガは、126億字分(漢字で63億字)となる。
**　ギガバイト：メガバイトの千倍。
\+　MIPS：Million per Second　一秒当り百万命令実行回数。従って一秒当り430万回の命令を実行する性能があることになる。
\#　この他に回線経由型端末9台がある。

表3　端末配布計画

		560/20III P	560/20III-I	漢字キーボード	プリンタ インクジェット	プリンタ インパクト
整理閲覧部	事務室(3F)	1	3	3	1	
	カウンタ(2F)		2		2	
	参考室(3F)		2		1	
文献資料部	事務室	1				
	第1室		1			
	第2室		1	1	1	
	第3室		1			
研究情報部	計算機室		1			
	情報処理室	1	5	2		2
	編集室		1	1	1	
	情報室		1			1
管理部	庶務課	1				
	会計課	1				
共同研究室			1		1	
史料館		1			1	
計		6	19	7	8	3

以上となり、館内各所で利用可能となる。そのためにソフトウェア・ハードウェアを利用するための『利用者マニュアル』の作成提供、システムのチューニング（ソフトウェア群と当館の特殊要求とのすりあわせ）、利用者ID、システム資源の管理方法と体制の整備、利用者講習会の開催とその後の利用者の教育訓練の計画と体制の整備等の準備を進めている。

最初に提供するサービスとして次の3種類を予定している。

◎日本語文書処理システム　オンラインかな漢字変換に基づく日本語入力及び編集システムならびに漢字プリンタを用いる清書システム。

◎索引作成システム　前記文書処理システムにより入力した各種の日本語データを索引化し編集印刷等を行うシステムで、検索を行うこともできる。試用のためのデータが準備されている。

◎論文検索システム　論文目録データのオンライン検索。

以上3種類のサービスや端末利用のために、次の5種類のマニュアルを準備、発行する予定である。i「計算機利用の手引き」計算機室の一般的な利用方法と規則等ならびに計算機システムの一般的な利用方法。ii「端末利用の手引き」端末の機能、その保守等を含む操作法ならびにシステム利用法。iii「日本語文書処理システム利用の手引き」日本語文書処理システムDEDIT／DRUNOFFの簡易利用の手引き。文書処理の基本をマスターする。iv「論文検索システム利用の手引き」論文検索サービスの操作法を習得する。コマンドの利用法、使い方ならびにメッセージの見方。v「索引作成システム利用の手引き」索引作成システムの全般をマスターする。既に入力済みの語彙解析あるいは自己用の本文あるいは語彙データ入力を行い索引作成等を行う。操作法、利用法をマスターする。その他順次必要に応じて発行の予定である。さらにvi「情報処理室システム・ニュースの発行」利用者用のニュースを可能もしくは必要なら2～3回／月発行しシステムの利用法や注意点等の周知を計る。

利用者の教育と訓練

「利用者ID」従来提供してきた業務単位のプロジェクトIDの他に、当館職員全員に利用者IDを配布し前記サービスの利用を計る。

「講習会」当面システム・ニュース等で利用ガイドを行いながら、10月を目途に講習会を計画中である。講習会は全利用者を対象とし2～3回開催する。

情報処理室の向う3年～5年の課題

これまでに作成されたシステムとデータを向う3年～5年の間にオンライン検索などのサービスに提供する予定である。サービスするデータベースの種類は次の8種である。①古典籍総合目録　②マイクロ資料目録　③和古書目録　④著者典拠ファイル　⑤論文目録　⑥試用古典テキスト（語彙・全文）　⑦逐次刊行物　⑧漢字字書（シソーラス）。この内58年度内に提供開始するものは『論文目録』と『試用古典テキスト（語彙全文）』である。

オンライン・サービス開始のための準備

館内での研究用業務用のオンライン検索ならびに利用サービスに対しては、ソフトウェア的には既に開発済みのものも多く、データベースの整備を急いでいる。端末等機械装置類の整備保守体制と運営上の問題点を検討中である。

利用サービス体制の整備

端末34台による利用が58年11月より可能となることから、利用者サービス体制の整備、マニュアルの整備などにより、全館的な利用を可能とすべく検討中である。これには単に、検索利用のみならず研究的なデータ作成や当館の主要業務に於けるデータ作成をも対象とすべく、これにより、全館的な共同利用、資源共有と省力化が可能である。例えばマイクロ資料に関わる調査、収集、撮影、フィルム検収と保管ならびに提供等の国文学研究を支援する一連の事務作業を機械化することも可能である。

現段階の位置づけ

昭和57年度は、単年度としてよりは、開館以来10年電算機導入以来5年という時間軸でとらえ、創設段階の決算期に入ったとみるべきである。それは例えば、

1　データ作成、データ処理に関してはマイクロ資料目録、和古書目録そして逐次刊行物目録など書誌的情報処理が軌道に乗ったこと。

2　データ・コントロールに関しては著者典拠コントロールが和古書目録システムに組み込まれ、マイクロ資料目録にも応用テストは成功しており、古典籍総合目録システムでは基本作業の一つとなるべく進化するところまできていること。

3　以上のデータ作成、データ・コントロールそしてデータ処理の実績をふまえて、古典籍総合目録システムの開発とデータ作成により、館内書誌情報処理の統合化が展開され始めたこと。

4　念願の機器入換えが大過なく決定され昭和58年度中には実現されること。このことにより i 情報処理室はもとより館内関係者に大きな経験が蓄積共有され、ii 広範な利用のための道具的基盤が整備された。

5　制度的には電算機専門委員会を準備会として発足させ、館内調整機能を組織的に実現しつつあること。

以上が創設段階の決算期に入ったとする理由である。

情報処理室のみならず当館全体における、システム設計と開発、データ作成と処理についてのノウハウの蓄積共有と管理運用上の共通理解は、今やシステムとデータベースとならぶ大きな財産である。

昭和58年度は創設段階の最終年度として考え、昭和59年度からは第二段階に入るものと言えよう。それは例えば、

1　館内利用サービスとしてデータ、システム、ハードウェアが整備される。特に索引作成システムは館内研究者に国文学研究上の道具としての提供の意義は大きい。

2　古典籍総合目録システムの中核部分の完成により、書誌情報処理の統合化が一定の完成度に達する。

3　検索サービス（古典テキスト、論文目録）の実現により創設以来の課題の一つが一応の解決をみる。

4　ハードウェアとしてワープロ機能端末の配布によりオフィス・オートメーションの一段階に達する。

5　データ整備の根幹は今年中には着手または完了の見込である。

しかしながら積み残しの課題も多い。例えば①主題情報に対する取り組み、②データ作成における概念や考えかたと実施における統合化、③著作権、データ管理、二次利用の問題等、④公開の問題として制度的整備ならびに接続手段の確保と実験等がある。さらに付言するなら⑤文献情報センターとの協力としては、その利用（日本全国書誌JAPAN／MARCによる新刊本の書誌情報処理、文献情報センターの各種サービスへの参加利用）、それへの提供（漢字字書、古典籍総合目録をはじめとする検索サービス、国文学関係の典拠データの提供）、そして接続手段の確保と実験、⑥館内業務の機械化としては年鑑、調査カード、調査計画、収集計画、研究者などの人的情報等のシステム開発の早期着手、⑦索引作成（語彙・全文検索）システムの強化拡大、⑧画像処理技術の導入（マイクロ資料、典籍中の挿絵）等が考えられる。

要約として、学界における情報流通に対する国文学研究資料館の寄与の課題としては①マイクロ資料と新刊本を含む典籍の収集・保存・提供、②機械可読形式の書誌的情報やテキスト（語彙・全文）ならびに字書辞書類のオンラインその他の方法による提供、さらに③研究者や作者など人的情報の提供、そして④集会や研究会等の会議情報の提供などが考えられる。

しかしながら、現在までのところ書誌的情報に関しては他に類を見ない概念的深化にもとずく設計は、我が国のみならずいわゆる図書館業務の機械化の分野において先進的な役割を果しており、また索引作成システムや古典テキスト、論文目録を始めとする検索サービスの実現により若干の研究用のツールを提供しつつあるが、『国文学研究に密着した計算機利用』という点では未着手であるといっても過言ではない。ここに利用者サービスのための制度的整備ならびにハードウェアソフトウェアの整備が、館内外の国文学研究者をはじめとする国文学情報の要求者への対応として、次の段階の課題が存在する。

（情報処理室長）

古典テキストデータ用データベースシステムの開発について

星野　雅英

1　はじめに

ことばやテキストを研究対象とする学問において、コンピュータの活用は一部ではかなり進んできた。しかし、システムの共用とデータの相互利用にはほど遠いのが現状である。

この点を踏まえて「古典テキストデータ用データベースシステム」を開発した。このシステムは次の4サブシステムからなる。

(1)蓄積処理システム
(2)索引誌作成システム
(3)オンライン全文検索システム
(4)データアクセス用支援プログラム

パッケージ

(1)は汎用的な蓄積処理システム、(2)は索引(誌)を作成するシステム、(3)はテキストの検索にふさわしい、〝テキストを読む〟機能を持ったオンラインの検索システム、(4)は蓄積されたデータベースへのアクセスを容易にするための支援プログラムである。

システムの詳細は報告書(1)に記した。ここでは、〝索引を簡単に作成する〟方法について概略を紹介する。

2　基本的考え方

従来の索引(誌)作成システムは、主にテキスト内容や研究・調査の目的に応じて独自に開発されたものが多く、他のテキスト、他の目的に利用するためには手直しするか、別のシステムを新たに開発する必要のある場合がほとんどのようである。この種の無駄をなくし、テキストの内容や研究・調査の目的が異なっても利用できる汎用的なシステムの開発が望まれていた。たとえば、古今集では和歌の句索引、単語索引、詞書の単語索引を、源氏物語では総索引と巻毎の索引を、太平記では名詞索引と人物名索引を作成したいというような要求に対して、テキスト毎に、索引の形態毎にそれぞれの専用のシステムを開発するのは大きな負担であり、運用上も、繁雑である。

ここ数年、システムを共通化できないか、利用者自身が簡単な操作で必要な索引をその都度作成できないか、他の人が作成したデータを相互に利用できないか、…と考えてきた。幸い〝漢字〟まわりのハードウェア／ソフトウェア環境が整ってきたこと、当館で容量の大きなディスクを使用できるようになってきたことから、ようやく本システムの実現に至ったわけである。

3　索引作成システムの概要

このシステムでは、研究者個人が分かち書き処理(語に区切る)を施し、読み、品詞などを付加することによって容易に種々の索引が作成できる。更に、テキストの内容や研究・調査の目的に応じて、語の種類(句、文節、単語等)やその数、属性の種類(表記、読み、品詞等)やその数を適宜設定することができる。

利用者の立場からみた、索引作成の流れを図1に示す。1～6は利用者がデータ作成や端末での操作を行う項目、a～dはそれを処理する各プログラムである。1、2を経て、3で利用者自らが漢字エディタを用いて、カナ漢字変換を利用して入力する。あるいは漢字キーボードから直接入力する。必要に応じて内容をプリントし修正をくり返す。データ作成が完了したら蓄積処理プログラムを用いて蓄積する。抽出処理プログラムを用いれば特定範囲の文や特定語を抽出することができる。索引作成プログラムを用いて、文脈付き索引、頻度順索引、総索引等を適宜選択して作成することができる。漢字端末にも、漢字プリンタにも出力できる。

4　索引作成例

作成例を図2に示す。(1)はデータの作成例である。1行目は文の種類(K＝詞書)、歌番号(1)、2～3行目は詞書、5行目は著者、7～11行目は和歌である。〝¥〟が各文(1、4、6、12、…行目)の始まりを示す。Kは詞書、Aは著者、Wは和歌を示す。和歌で、〝&〟は句の区切りを、他の文も含め〝!〟は語の区切りを示す。〝( )〟内は読みを示す。和歌3首、9つの文の例の一部を示した。(2)は文脈付索引の作成例である。〝IDX〟は索引の種類(1＝総索引、2＝頻度索引、3＝文脈付索引)を指示できる。〝BUN〟で文の種類を指示できる。あるいは各句索引も同様に作成できる(〝SEP〟で指示する。この例では省略したので単語の索引が出力された)。

5　まとめ

使用例で示したように、比較的簡単に索引を作成することができる。ただ残念ながら、今のところコンピュータは自動的に古典テキストデータを入力することも、分かち書きや読みの付加を自動的に行うこともできない。利用者がコツコツとデータを作成し入力せざるを得ない。しかしながら、一旦データを入力しておけば、その都度種々の索引を作成したり、他の人が利用することもできる。また、今後の展開次第では国文学の研究自体に大いに利用できるのではないかと思われる。

本システムは、システムやデータベースの共通化の第一歩として踏みだしたにすぎない。今後の利用と展開を期待したい。

(参考文献)

(1)星野　古典テキストデータ用データベースシステムの開発、国文学研究資料館報告No.11、P88(1983・3)
(2)星野、田嶋　古典テキストデータの全文検索システム、情報処理学会「自然言語処理技術」シンポジウム論文集、P137―142(1983・6)

(情報処理室)

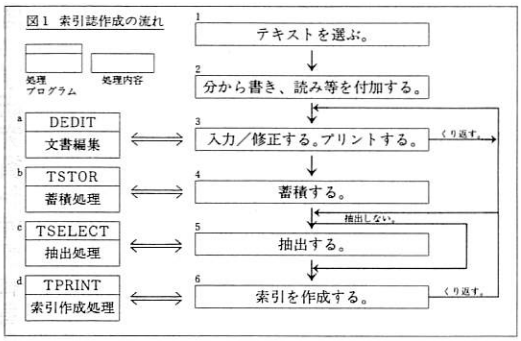


図2 索引作成の例

```
(1) データ作成例(一部)
000100 ¥K, 1
000200 ふる(ふる)!とし(とし)!に(に)!春(はる)!たち(たち)!
000300 ける(ける)!日(ひ)!よめ(よめ)!る(る)
000400 ¥A, 1
000500 在原(ありはら)!元方(もとかた)
000600 ¥W, 1
000700 年(とし)!の(の)!内(うち)!に(に) &
000800 春(はる)!は(は)!き(き)!に(に)!けり(けり) &
000900 ひととせ(ひととせ)!を(を) &
001000 こぞ(こぞ)!と(と)!や(や)!いは(いは)!ん(ん) &
001100 ことし(ことし)!と(と)!や(や)!いは(いは)!ん(ん) &
001200 ¥K, 2
001300 春(はる)!たち(たち)!ける(ける)!日(ひ)!
001400 よめ(よめ)!る(る)
001500 ¥A, 2
001600 紀(きの)!貫之(つらゆき)
001700 ¥W, 2
001800 袖(そで)!ひち(ひち)!て(て) &
001900 むすび(むすび)!し(し)!水(みず)!の(の) &

(2) 文脈付索引作成例 (一部)
>> TPRINT STEXT IDX(3) BUN(W)
たつ 0002          #袖ひちてむすびし水のこぼれるを春 たつ けふの風やとくらん
たて 0003                    #春霞 たて るやいづこみよしのの吉野山に雪はふりつつ
つつ 0003 てるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ #春霞た
て 0002                    #袖ひち て むすびし水のこぼれるを春たつけふの風やとくらん
と 0001 はきにけりひととせをこぞとやいはんことし と やいはん #年の内に春
と 0001      #年の内に春はきにけりひととせをこぞ と やいはんことしとやいはん
```

英米の図書館機械化をめぐって

宮澤　彰

昨年の3月から6ヶ月間、在外研究でイギリス、カナダ、アメリカに行っておりました。すでに、帰国後1年近くもたっており、ホットな気憶もさめて来てはおりますが、印象を記してみたいと思います。

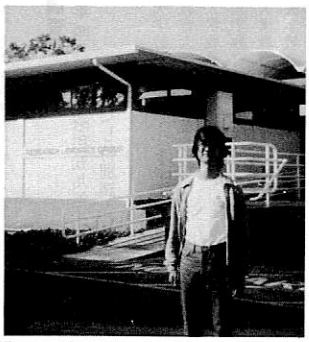
この三国は図書館という組織と利用法を確立した点で先進国であり、コンピュータを図書館に利用する方法の面でも先んじていて、その方面でのシステムがようやく本格的になりつつある日本にとって学ぶところの多い国です。これらの国では複数の図書館で MARC を中心に目録をオンライン端末上で共同作成するいわゆるオンライン・シェアド・カタロギング・システムを中心に機械化が進められてきました。アメリカの OCLC、RLIN、カナダの UTLAS 等はこの分野で実績を持ったシステムですし、イギリスでは LASER SWALCAP、SCOLCAP 等がオンラインサービスを開始したところでした。

私の印象は、特にアメリカでこれらのシステムが一般的になっていくにつれ、新たな展開が見えはじめて来たという点です。その1つはカードにかわる書誌情報へのアクセス方法、もう1つは選書・受入や、閲覧などの図書館業務と、目録との統合化されたシステム化の方法という点です。カードにかわるアクセス方法という点ではニューヨーク公共図書館（リサーチライブラリ）が好い例でしょう。ここではカード目録を閉鎖し、冊子体の目録をコンピュータで作っていたわけですが、年々の増加に対し、全目録を印刷し直すというのは予算的にも無駄になってしまうということでした。かといってオンラインアクセスは未だ一般利用者にサービスできるものではなく、次の方法を模索しています。もう1つの統合化されたシステム化という点では、OCLC や RLIN のような大規模な目録システムでは、組織的にも細い対応は不可能になっており、多くの図書館が困っているようです。

これらに対する新しい展開として注目すべき事は、ミニコンピュータ等を使って各図書館のローカルな業務をこなし、且つ OCLC の様な目録サービスにもつながるシステムが商業ベースで数多く出て来た点です。いわばバックエンドに目録システムを持った分散処理のオンラインシステムを目指したものといえましょうか。もちろん各社で作った別々の物のため、システム毎にパブリックアクセス指向のもの、業務統合化指向のものと、力点のおき方は様々ですが、全体的傾向としては目録オンラインを前提としたローカルシステムと見るこができるように思います。この傾向は、ようやくオンライン目録システムの実現のめどのついた我国のこれからにとっても大いに参考になる点ではないでしょうか。

短い文章で意は尽くせませんが、当館を含めコンピュータ利用に益するところがあれば幸いです。

（情報処理室）



Research Libraries Group（スタンフォード）にて。

国文学研究資料館評議員名簿

任期　昭和五七年七月一日～昭和五九年六月三〇日

阿部秋生　実践女子大学文学部教授　東京大学名誉教授
石井良助　創価大学法学部教授　東京大学名誉教授
伊地知鐵男　元早稲田大学文学部教授
臼田甚五郎　國學院大学文学部教授
小田切　進　立教大学文学部教授　日本近代文学館理事長
加藤周一　上智大学外国語学部教授
久曾神　昇　愛知大学長　愛知大学理事長
児玉幸多　学習院大学名誉教授
小葉田　淳　京都大学名誉教授
斎藤　正　東京国立博物館長
佐藤喜代治　フェリス女学院大学文学部教授　東北大学名誉教授
谷山　茂　大阪市立大学名誉教授　京都女子大学名誉教授
土田直鎮　国立歴史民俗博物館長
野間光辰　京都大学名誉教授
林　大　国立国語研究所名誉所員
古島敏雄　東京大学名誉教授
宝月圭吾　東京大学名誉教授
松尾　聰　学習院大学名誉教授
松田智雄　図書館情報大学長　東京大学名誉教授
山本達郎　東京大学名誉教授

国文学研究資料館運営協議員名簿

任期　昭和五七年八月一日～昭和五九年七月三一日

秋山　虔　東京大学文学部教授
今井源衛　梅光女学院大学文学部教授　九州大学名誉教授
小林清治　福島大学教育学部教授
小山弘志　国文学研究資料館長
佐竹昭廣　京都大学文学部教授
神保五彌　早稲田大学文学部教授
棚町知弥　国文学研究資料館研究情報部長
長谷川　強　国文学研究資料館文献資料部教授
秀村選三　九州大学経済学部教授
尾藤正英　東京大学文学部教授
福田秀一　国文学研究資料館文献資料部長
藤村潤一郎　国文学研究資料館史料館教授
本田康雄　国文学研究資料館整理閲覧部長
松本隆信　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長
水谷静夫　東京女子大学文理学部教授
安澤秀一　国文学研究資料館史料館教授
山中光一　国文学研究資料館研究情報部教授

昭和五八年度 国文学文献資料収集計画委員会委員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日

有吉　保　日本大学文理学部教授
石田穣二　東洋大学文学部教授
大内初夫　鹿児島大学教養部教授
尾形　仂　成城大学文芸学部教授
梶原正昭　早稲田大学教育学部教授
鈴木一雄　明治大学文学部教授
田中　稔　国立歴史民俗博物館歴史研究部教授
土田　衛　大阪女子大学芸学部教授
鳥居フミ子　東京女子大学文理学部教授
山本信吉　文化庁文化財保護部美術工芸課長

昭和五八年度 文献目録委員会委員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日

大矢武師　静岡大学教育学部教授
久保田　淳　東京大学文学部助教授
小島孝之　立教大学文学部助教授
小町谷照彦　東京学芸大学教育学部助教授
曽倉　岑　青山学院大学文学部教授
滝藤満義　横浜国立大学教育学部助教授
浜野卓也
原　道生　明治大学文学部教授
古田東朔　東京大学教養学部教授
吉田熙生　千葉大学文学部教授

昭和五八年度 情報検索委員会委員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日

稲岡耕二　東京大学教養学部教授
杉田繁治　国立民族学博物館第五研究部助教授
照井武彦　国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
西村恕彦　東京農工大学工学部教授
堀内秀晃　青山学院大学文学部教授
水谷静夫　東京女子大学文理学部教授
山本毅雄　図書館情報大学図書館情報学部教授

昭和五八年度 国文学文献資料調査員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日
（ただし特別調査員を除く）

〔北海道・東北〕
片野達郎　東北大学教養部教授
金沢規雄　宮城教育大学教育学部教授
神山重彦　山形大学教養部助教授
佐藤　稔　秋田大学教育学部助教授
寺島恒世　山形大学教育学部講師
原田貞義　岩手大学教育学部教授
丸山　茂　弘前学院大学文学部教授

〔関　東〕
浅見和彦　成蹊大学文学部助教授
揖斐　高　成蹊大学文学部助教授
石川　了　大妻女子大学文学部講師
板坂則子　群馬大学教育学部講師
宇田敏彦　戸板女子短期大学助教授
岡本隆雄　群馬県立女子大学文学部助教授
粕谷宏紀　日本大学文理学部教授
鎌倉憲子　明昭学園岩倉高等学校講師
川村晃生　慶應義塾大学文学部助教授
斎藤　彰　昭和女子大学短期大学部講師
清水宥聖　大正大学文学部非常勤講師
竹本幹夫　実践女子大学文学部助教授
塚田晃信　東洋大学短期大学助教授
月本雅幸　茨城大学人文学部講師
土井洋一　学習院大学文学部教授
外村南都子　白百合女子大学文学部教授
平田喜信　横浜国立大学教育学部教授
牧野和夫　東横学園女子短期大学講師
宮本瑞夫　立教女学院短期大学助教授
武藤元昭　青山学院大学文学部教授
和田英道　跡見学園女子大学文学部助教授

〔中　部〕
青山克彌　金沢女子短期大学教授
稲垣泰一　金城学院大学文学部助教授
粕谷興紀　皇学館大学文学部助教授
鈴木孝庸　新潟大学教養部講師

竹村信治　金沢美術工芸大学美術工芸学部講師
中　哲裕　長岡技術科学大学工学部助教授
服部　仁　同朋大学文学部講師
早川厚一　名古屋学院大学経済学部助教授
古屋　彰　金沢大学文学部助教授
森下純昭　岐阜大学教養部助教授
矢野貫一　愛知県立女子短期大学助教授
安田文吉　南山大学文学部助教授
山下宏明　名古屋大学文学部教授

〔近　畿〕

阿部泰郎　(財)元興寺文化財研究所研究員
新井榮藏　奈良女子大学文学部教授
石川真弘　大谷女子大学文学部教授
出雲路　修　京都府立大学女子短期大学部助教授
榎本正純　武庫川女子大学文学部助教授
岡田彰子　大阪青山短期大学講師
片岡利博　松蔭女子学院大学文学部講師
金光洋三　大阪女子大学芸学部助教授
加納重文　京都女子大学文学部助教授
楠橋　開　京都外国語大学外国語学部講師
黒田　彰　関西大学文学部非常勤講師
小林賢章　大阪府立大学総合科学部講師
阪口和子　羽衣学園短期大学助教授
笹川祥生　京都府立大学女子短期大学部助教授
島津忠夫　大阪大学教養部教授
土谷泰敏　大阪教育大学教育学部講師
鶴崎裕雄　帝塚山学院短期大学助教授
寺島樵一　武庫川女子大学文学部助教授
長坂成行　奈良大学文学部助教授
橋本直紀　大阪府立淀川工業高等学校教諭
廣田哲通　大阪女子大学芸学部講師
福嶋昭治　園田学園女子大学文学部助教授
藤田真一　追手門学院大学文学部講師
堀口康生　大阪女子大学芸学部講師
和田克司　大阪成蹊女子短期大学教授

〔中国・四国〕

稲葉二柄　香川大学教育学部助教授
熊本守雄　山口女子大学文学部教授
佐藤恒雄　香川大学教育学部教授
美山　靖　愛媛大学法文学部教授
吉山裕樹　比治山女子短期大学講師
米谷　巌　広島大学文学部助教授
渡辺憲司　梅光女学院大学短期大学部助教授

〔九　州〕

荒木　尚　熊本大学文学部教授
小川幸三　熊本短期大学助教授
白石悌三　福岡大学人文学部教授
竹原崇雄　熊本女子大学文学部助教授
米倉利昭　佐賀大学教育学部教授

〔国文学文献資料特別調査員〕

伊藤正義　大阪市立大学文学部教授
岡本　勝　愛知教育大学教育学部教授
表　章　法政大学文学部教授
坂田　新　愛知県立女子短期大学講師
櫻井治男　皇学館大学神道研究所講師
島崎　健　京都大学教養部助教授
名子喜久雄　山形大学教育学部講師
名和　修　(財)陽明文庫主事
松野陽一　東北大学教養部教授
松原一義　四国女子大学文学部助教授
村上　學　豊橋技術科学大学工学部教授
山口　博　富山大学人文学部教授

昭和五八年度
国際日本文学研究集会委員会委員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日

池田　重　千葉大学教育学部教授
臼田甚五郎　國學院大学文学部教授
芳賀　徹　東京大学教養学部教授
長谷川　泉　学習院大学非常勤講師
ドナルド・キーン　コロンビア大学教授

昭和五八年度
共同研究委員会委員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日

秋山　虔　東京大学文学部教授
稲賀敬二　広島大学文学部教授
島津忠夫　大阪大学教養部教授
神保五彌　早稲田大学文学部教授
松崎　仁　立教大学文学部教授

昭和五八年度
古典籍総合目録委員会委員

任期　昭和五八年四月一日～昭和六〇年三月三一日

乙骨達夫　国立国会図書館収集整理部主任司書
菊地勇次郎　大正大学文学部教授
沙藤隆茂　東京大学附属図書館事務部長
柴田光彦　早稲田大学附属図書館調査係主任
堤　精二　お茶の水女子大学文教育学部教授
森川　彰　梅花女子大学文学部教授

昭和五八年度
共同研究員

任期　昭和五八年四月一日～昭和五九年三月三一日

今西　寅　天理大学文学部教授
岩下紀之　愛知淑徳大学文学部講師
奥田　勲　宇都宮大学教育学部教授
清登典子　鶴見大学女子短期大学部非常勤講師
沢井耐三　愛知大学教養部教授
島津忠夫　大阪大学教養部教授
徳江元正　國學院大学文学部教授
鶴崎裕雄　帝塚山学院短期大学助教授
平川祐弘　東京大学教養学部教授
渡辺憲司　梅光女学院大学短期大学部助教授

人事異動

（昭和五十八年三月～昭和五十八年七月）

（昇　任）　昭和五十八年五月一日付
文部教官（研究情報部助教授）　安永尚志（東京大学より）

（転　出）　昭和五十八年四月一日付
文部教官（文献資料部教授）　村上　學（豊橋技術科学大学へ出向）

（辞　職）　昭和五十八年三月三十一日付
文部教官（史料館教授）　大野　瑞男（東洋大学就職）

（客員教授）昭和五十八年四月一日～昭和五十九年三月三十一日
文献資料部　井上宗雄（立教大学より）

（併任）
文部教官（文献資料部助教授）　服部　幸造（福井大学より）

インディアナ大学 源氏物語研究集会参加記

伊井　春樹

ブルーミントンにあるインディアナ大学で、源氏物語だけの国際的な学会を開く予定であるらしいと聞いたのは、昭和五十六年の夏であった。すこし関心を示したところ、スミエ・ジョーンズ教授から発表してほしい旨の手紙と、スケジュールの内容などが届けられた。すっかり面食らい、発表など考えてもいなかったし、一年も先のことなので、そのままにしていた。翌年の三月から二ヵ月間、オーストラリア国立大学に招かれて出かけることになった。その直前、五十七年度の文部省在外研究員に内定したのである。それならばよい機会なので、源氏物語の研究集会だけでも少しのぞき、イギリスへ回ることにしようと予定を立て、その旨来日していたロバート・ブラワーさんに伝えた。個人的に知った人もいく人か出席するらしいので、旧交を暖めるのにもよいだろうと思った次第である。

メルボルンに滞在中、ジョーンズ教授から速達があり、「ブラワーさんから学会へ出席する旨の手紙をもらったが、折角の機会なので発表してほしい。昨年すでに依頼しており、発表するものと予定して時間は空けている。発表要旨を至急送ってほしい」という内容だった。オーストラリア国立大学のトーマス・ハーパーさんも、ぜひ発表した方がよいとのことなので、突然で何も資料は持ち合せていなかったが、とにかく翻訳してもらって急送したのである。

五十七年八月、すこし早めにアメリカへ出かけ、ロスアンゼルス、サンフランシスコと回り、十六日に空港でサイデンステッカーさんと出会った。一緒にブルーミントンへ行こうと、かねて時間など東京で約束していたのだ。見知らぬ土地で知った人と出会うのは、とても懐かしく、不安な思いも無くなってしまう。夜九時前にインディアナポリス空港着、そこにインディアナ大学のユージン・オーヤン教授が迎えに来て下さっていた。ブルーミントンまでは、車で一時間である。

このような次第で、ブルーミントン滞在中、ツイン・コネクトという変った様式のホテルで、一部屋ずつサイデンステッカーさんと過ごすことになった。十七日は二人で食事、散歩とブラブラし、夕方からはレセプション。その後、インディアナ大学の岩本さんの案内で、サイデンステッカー、ブラワー夫妻、バウリング、ゴッフさんなどと食事に出かけ、ブルーミントンでの二日目の夜も楽しくすごすことができた。

十八日から二十一日の昼まで、二十六の研究発表、二つのパネル・ディスカッション、講演一つという過密なスケジュールであった。朝八時半から夕方五時までという、驚くべきタフネスぶりである。日本では八時半始まりなどというのは考えられないし、あったとしてもまず人はあまり集まらないであろう。ところが、八時半の副学長の挨拶の折には、予定されていた参加者がほとんど出席しており、その状態で四日間続いたのである。驚異としか言いようがない。しかも、発表が終るたびに、次々と質問者が出るのも、新たな驚きだった。発表者と真剣に討議することが、参加者の務めでもあるかのような気迫である。私の乏しい英語力では、どれほども聞き取れないのだが、この学会への参加は貴重な体験であった。それと発表要旨とは別に、発表の原稿そのものが、分厚い二冊の冊子となって配られたことなど、日本の学会でも学ぶべき点が多くあるように思う。ただ、その準備などには大変なご苦労があったことだろう。

二十二日、サイデンステッカーさんと別れてボストンへ飛び、ゴッフさんの案内で市内を観光したり、ボストン美術館の古筆切やフォグ美術館の古写本の調査などをして数日すごした。その後、ロンドンに四十日、パリに四日滞在し、二ヵ月の長い旅を無事終えることができた。

（文献資料部助教授）

文献資料部事業報告

福田　秀一

この『館報』もすでに二十号を越えた。文献資料部としても、大久保

前部長以来、毎号一定のスタイルで所管事業の進渉状況の報告を行ってきたが、今回からやや体裁を変え、事業の内容を簡潔に記述することとして、事業遂行のための諸会議の報告などは、項目としては挙げないこととした。主として紙幅の制約と気分一新のためであり、陰に陽に当館の使命と事業に御理解・御協力下さっている各種の委員・調査員ならびに所蔵者等への感謝の念は変わらない。

以下、前号に報告した本年一月末以後、七月末頃までの当部の主な事業とその進渉状況につき概略述べる。

昭和五十七年度国文学文献資料調査・収集結果　これについては前号にやや詳しく説明したが、その後三月末までの追加とそれを加えた昨年度の合計は次の如くである。

一、調査

追加される所蔵者・文庫名としては、関東地区に茨城大学附属図書館・東洋文庫・学習院大学国語国文学研究室、中部地区に富山大学附属図書館（ヘルン文庫）・小松天満宮、九州地区に武雄市教育委員会（武雄鍋島文庫）があり、国内の合計は五七箇所八、二〇二点となった。更に、海外として大英図書館（教官の文部省在外研究費による成果で臨時的なもの）四三七点がある。

二、収集

追加所蔵者・文庫名としては、関東地区に宮内庁書陵部、近畿地区に大阪府立中之島図書館、九州地区に九州大学附属図書館（支子文庫）があり、国内の合計は三七箇所五、三二八点であった。

その他に、海外よりの収集（マイクロフィルム入手）として、米国議会図書館（一〇点）、大英図書館（一四点）、ケンブリッジ大学図書館（一〇二点）、フランス国立図書館（一九点）の四箇所があるが、これら海外所蔵機関に関しては今のところ当館としての調査ができず、たまたま得た情報や不完全なリストによって出願・発注しているため、各機関の所蔵状況から見れば質的にも量的にもアンバランスで不十分な収集となっていることは否めない。

昭和五十八年度文献資料調査・収集計画　これについては例年通り昨年後半から立案にかかり、本年三月の収集計画委員会の検討も経て、調査に関しては国内で五三箇所七、三八〇点、収集に関しては同じく国内で三四箇所五、〇二五点を計画した。そしてその遂行のために全国六地区に本年度も計七八名の調査員を委嘱し、また対象文庫の必要に応じ臨時的な特別調査員をも一〇名近く委嘱して、特に今年度一年間を通じて御協力願う調査員に対しては、例年通り五月に当館で開かれた調査員会議の席で今年度計画を説明して協力を乞うと共に、地区あるいは文庫ごとに必要な打合せをも行った。その後現在まで約三箇月、本年度の調査・収集計画は、きびしい予算の制約はあるが、調査員や所蔵者・関係者等の御支援・御好意を得て、順調に進みつつある。

なお海外資料の調査に関しては、今年度当部の教官を主体にしたメンバーで文部省科学研究費（海外学術調査）の交付を受けることができたので、今秋約一箇月にわたって、米国カリフォルニア大学バークレイ校の旧三井文庫本の調査を実施する予定である。また収集に関しては、先年来出願・発注済の西独ルール大学ボッフム東亜学部蔵書やスウェーデン王立図書館蔵ノルデンショルド・コレクションの一部その他が、今年度中に入荷の見込である。

第四室　客員部門としての第四室は、今年度の研究テーマとして和歌文学の研究と語り物文学の研究との二つを立て、井上宗雄氏（立教大学教授）と服部幸造氏（福井大学助教授）とに就任願った。掲出研究テーマとしては右の如くであるが、運用としては、国文学研究に重要な意義を有する文庫で目録が不十分なものについて、当館がすでに所有している調査データ（カード）と収集資料（紙焼写真又はポジフィルム）とによる研究（書名認定、系統判別、注記等）を行い、その結果を一種の目録形式に記録するもので、当面約十年間、毎年各分野の専門家に委嘱して成果を蓄積し、完成の時点では所蔵者の了解を得て学界に提供したいと考えている。

第一～三室　正員をもって構成する第一～三室においては、前述の調査・収集計画の遂行に全力を注ぐかたわら、第一室は昨年度来継続の逸翁美術館蔵国文学資料の解題研究（共同研究の一テーマ）及び古筆切索引の作成を、第二・三室においては、同じく先年来継続の和古書表紙文様の集成と研究や国文学資料を主とした蔵書印の集成と研究を、それぞれ行っている。これらについては今後とも資料所蔵者の御教示・御協力によるところが多いと思われ、この機会に一層の御支援をお願いする。

（文献資料部長）

研究情報部事業報告

棚町　知弥

昨年来昭和三十七年以前研究文献目録編集のため臨時編集室を組織したが、五ヶ年計画最後に当る本年度もその体制を維持して事業の完了を目指している。

館創立当初から情報処理に当たって来た田嶋一夫助教授（情報処理室長）が四月、文献資料部へ移り、内藤衛亮助教授が同室長に併任された。また同室の欠員に、五月、東大地震研究所から安永尚志助教授を迎えた。本年度はコンピュータの機種も更新され、当館の情報処理もこれまでの基礎の上に第二のスタートを迎える。その意味で別稿に総括的な報告も行っている。

情報室

国際日本文学研究集会は、昨年十周年記念事業の意味もあってやや規模を拡大して行ったのを機に、今年度から古稀を迎えられた井本農一委員長が退かれ、芳賀徹委員が加わることとなり、臼田甚五郎委員長のもとで計画が進められることになった。

本年は特に八月三十一日から九月七日まで日本学術会議等の主催する大規模な国際アジア北アフリカ人文学会議（CISHAAN）が東京と京都で開催されるので、当館の研究集会の開催時期等をどうするか再検討されたが、やはり従来通り十一月に行なうこととし、研究発表の公募を行った。結果は従来を上廻る応募があり、八月二十日の委員会で研究発表者とプログラムを決定した。

他の当室の事業は、昭和三十七年以前研究文献目録事業に協力することもあって本年度は拡大よりも極力能率化につとめた。

編集室

編集室では、三月末に『国文学年鑑』の昭和五六年版と『国文学研究資料館紀要』第九号とを、刊行した。現在は、昭和五七年版『年鑑』の作成に携わる一方で、継続中の『昭和三七年以前国文学研究文献目録』（仮称）の完成を急いでいる。五ヶ年計画で出立したこの目録作成事業も、いよいよ最終年度に入ったわけで、総データ件数四万四千のコンピュータ処理に寧日なき状況である。

情報処理室

情報処理室の活動状況については、本号に別途『当館情報処理の現状と展望』として要約説明している。

昭和58年10月末を期して計算機の更新と、端末34台の全館的配備を行うのに伴い、利用者サービスを一層本格化すべく準備している。館内サービスの本格化は、いずれ実現する館外に対する公開サービスの前提となるものである。

古典籍総合目録システムの開発は、今年既に「入力作業手順の確立」を計り、その中核部分であるDBMSを中心とするファイル設計、著者と著作典拠コントロール、書誌データローダなどの開発にかかっている。

索引作成システム（本号別項参照）の完成にともない試用のデータ整備を昭和58～59年にわたり行う。

共同研究『連歌』への支援活動としてシステム分析、設計、開発を共同研究『連歌』のメンバーと協議検討し、今年後半には、入力部のプログラム開発にはいる。

従来開発してきたデータとシステムを整理し、古典籍総合目録システムを中心に統合化するための準備作業を進めており、この延長に、近い将来の公開サービスの開始があると想定して、ハードウェアならびに回線による接続手段、ソフトウェア、データベース、そして制度的側面の検討に鋭意努力している。

作業環境として厳しい状況にあり、全館的支援のもとに以上の作業を進めている。

（研究情報部長）

整理閲覧部事業報告

本田　康雄

資料の収集、受入、整理、保存及び利用サービス、並びに公開講演会の開催等の定常的業務は順調に進展した。

昭和五十五年度から始まった古典籍総合目録作成事業は、これまで、古典籍総合目録委員会、同専門委員会を中心に事業の計画、方法等の検討をすすめてきた。又、情報処理室、整理閲覧室においてコンピュータ・システムの検討を行い、一方、アンケート調査等によって、古典籍資料の所蔵状況を把握し、所蔵目録類の収集もすすめてきた。これらの努力の結果、システムの開発、データの作成、データ内容の点検等の基本的

な作業についての全館的な体制がほぼ整った。この事業の当面の目標として数年後に作成する予定である中間版の完成にむけて努力したい。

なお、昭和五十八年四月一日付で、歌野博閲覧係長が整理係長に、鈴木一正整理係長が閲覧係長に配置換となった。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

昭和五十七年度の受入資料数、および同年度末での蔵書数は、別表のとおりであった。

昭和57年度受入、所蔵資料統計

資料種別		昭和57年度受入資料数 点数	昭和57年度受入資料数 冊(リール)数	蔵書数(昭和57年度末現在) 点数	蔵書数(昭和57年度末現在) 冊(リール)数
マイクロ資料	マイクロフィルム	5,480点	1,285リール	56,746点	12,259リール
	マイクロフィッシュ	−	−	3,397点	10,008枚
	紙焼写真本	2,272点	3,332冊	29,984点	25,705冊
図書(古書及び新刊書)		2,794点	4,012冊	14,828点	53,016冊
逐次刊行物		1,100点	6,305巻号冊	2,630誌	58,865巻号冊
寄託図書		10点	10冊	118点	154冊

昭和五十八年度も、予算の確定に伴い、例年どおり資料の受入れを行っている。ひきつづき、マイクロ資料の受入れはもちろんのこと、写本・版本、複製・翻刻資料、国文学関係研究書、逐次刊行物等国文学関連資料の総合的な収集・受入れに努めたい。

なお、『逐次刊行物目録一九八三年』を例年どおり刊行した。

(2)古典籍総合目録作成事業

古典籍（江戸時代以前の写本・版本）の総合目録を作成するためのステップとして、①所蔵目録の収集、②書誌・所在データの作成、③データのパンチ・校正とコンピュータへの入力、④蓄積された書誌データによる同一書のとりまとめ、⑤作品データの作成・入力、⑥著者名のコントロール、⑦総合目録本体の編集、⑧索引の編集、があり、さらに、古典籍総合目録の諸データと当館の既存の書誌データ（マイクロ資料目録、和古書目録）との統合・調整の作業がある。③以降のステップはすべてコンピュータを利用した作業である。

今期は、これまでに作成した書誌・所在データの点検作業を開始し、さらに一部のデータについては、コンピュータ入力のためのパンチ・校正作業も始めた。一方、書誌・所在データの入力システム（情報処理室で開発）も完成したので、書誌・所在データの作成から、そのコンピュータへの蓄積に至る作業体制がほぼ固まってきた。ひきつづき、書誌・所在データの蓄積をすすめていきたい。

(3)整理業務

当館所蔵原本（写本・版本）を対象とした初の冊子体目録『和古書目録一九七二―一九八一』に続き、その後の増加分を収録した『和古書目録増加1（一九八二）』を刊行した。収録書目数は約八六〇点である。また、和古書整理のこれまでの経験を踏まえ、その現状と問題点や著者名典拠コントロールについて、『和古書目録データベースの形成と著者名典拠ファイル』（『国文学研究資料館報告』第10号）としてまとめ、報告した。

マイクロ資料の整理も順調に進み、陽明文庫他三五文庫、八九二三点を収録した『マイクロ資料目録一九八二年』を刊行した。これで六冊目となる。一九八三年版（第七冊）のためのデータ入力も既に二〇〇〇点ほどの行った。

貴重書指定小委員会において、『薬師通夜物語』が貴重書に指定された。

(4)閲覧業務

昭和五十七年度は、入室者数が七、一五二人（一日平均二六人）、文献複写が一一、五三五件（一日平均四二件）で、いずれも前年度に比べて増加した。特に文献複写のうち、マイクロフィルムのリーダープリンターによる複写は六一七件で前年度の約二倍に増えた。利用登録者数も累計（三月末まで）で九、二四七人に達した。また、相互利用の申込受付は、四二五点であった。

なお、蔵書点検を例年通り、三月二十五日から三十一日にかけて実施した。

(5)マイクロ室業務

作業用ネガフィルムは、大阪女子大学附属図書館他二七文庫一一七リールを作製した。閲覧用ポジフィルムは、青森県立図書館工藤文庫他九文庫四九一リールを作製し、五十五年度収集分の加工を終了した。紙焼写真本については六一〇リール分の焼付けを行い、陽明文庫、斎藤報恩会等の二五九一冊の製本を行った。文献複写サービスの撮影を二九点、ポジフィルム二七点を作製した。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持に当たった。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第18回公開講演会（6月18日、於当館）
「近代文学における「向う側」の空間」キンヤ・ツルタ氏（ブリティッシュ・コロンビア大学教授、本年度当館客員教授）、「文学テキストの空間性について」前田愛氏（立教大学教授）
●常設展示
第18回・江戸から明治へ（昭和57年12月1日～昭和58年3月24日）
第19回・日本古典文学史（4月11日～6月25日）
なお、昨夏の第5回夏期公開講演会の筆録集である『日本の歌謡（国文学研究資料館講演集4）』を刊行した。
（整理閲覧部長）

利用登録者一万人を突破

閲覧業務開始六周年を目前にした七月十四日、利用登録者が一万人を突破しました。一万人目の登録者となったのは、京都の坂倉恭子さん（仏教大学学生）。「おかげまいり」の研究のため来館されたとのこと。坂倉さんには、整理閲覧部長から、記念品と花束が贈られました。

共同研究

昭和五十八年度は、前年度から引き続く(1)、(2)のほか、外国人研究員を中心とするシリーズの共同研究が内容を新たにして実施された。

(1)逸翁美術館蔵国文学関係資料の研究

科学研究費により実施した研究を五十七年度から引き継いだもので、五十八年度は、館外二名、館内三名により古写本・古筆切・絵巻の解題と、俳諧関係の懐紙・色紙・短冊等の調査を進めている。年度末までには、すべての目録と一部の解題を付した原稿を作成する予定である。

(2)連歌資料のコンピュータ処理の研究

三年計画の二年次で、今年度は館外五名館内三名で実施されている。夏までに全体会議を二回行い、昨年来約二〇〇〇点の試行採録の経験にもとづいて、本カードの様式を決定し、情報処理室にプログラミングをゆだねた。

一方目録試作のため同フォーマットによる館蔵連歌資料のデータ採録作業も、紙焼き資料によるものは完了し、フィルムだけの分について進行中である。

(3)日本文学における「向う側」の研究

八三年度の外国人研究員として当館が迎えたブリティッシュ・コロンビア大学の鶴田欣也教授を中心に、館外から平川祐弘（東京大学教授）、徳江元正（國學院大学教授）の二名、館内四名（福田、山中、桑野、奥出）により、四月十五日鶴田教授の着任をまって新にスタートした。現在までに五月十七日　「近代日本文学における〈向う側〉」鶴田欣也
六月二十二日　「ダンテの『神曲』における〈向う側〉」平川祐弘、「中世説話における他界」徳江元正
七月二十七日　「桃源郷のトポス」芳賀　徹
九月九日　「近代西洋文学における〈向う側〉」鶴田欣也
を中心に研究会を行った。鶴田氏は九月十四日任期を終り、期間等の制約はあったが、今後共同研究としての成果の取りまとめに努力したい。
（共同研究委員会委員長　棚町知弥）

評議員会議の開催について

本年度第一回評議員会議が七月十五日（金）に当館大会議室において、石井議長ほか十五名の評議員の出席を得て開催され、議事は管理運営の概況、昭和五十七年度事業報告、昭和五十八年度事業及び昭和五十九年度概算要求等について評議が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第一回運営協議員会議が七月十二日（火）に当館中会議室において、小山議長ほか十三名の出席を得て開催され、議事は管理運営の概況、昭和五十七年度事業報告、昭和五十八年度事業及び昭和五十九年度概算要求等について協議が行われた。

委員会日誌

5月11日　国際日本文学研究集会委員会（第一回）
5月17日　国文学文献資料収集計画委員会（第一回）
5月26日　国文学文献資料調査員会議（総会）
6月22日　国際日本文学研究集会委員会（第二回）
6月28日　共同研究委員会（第一回）
7月7日　文献目録委員会（第一回）
7月19日　情報検索委員会（第一回）
8月20日　国際日本文学研究集会委員会（第三回）

利用者へのお知らせ

◆逐次刊行物全冊開架コーナーの増設

当館では、利用頻度の高い雑誌の全冊開架を行っておりますが、このたび新たに三十五誌を追加しました。これによって、今までの十一誌と合わせて計四十六誌になりました。四十六誌のタイトルは、次のとおりです（五十音順、＊印は追加分）。

1 ＊解釈（解釈学会）
2 ＊近世文芸（日本近世文学会）
3 ＊近代語研究（近代語学会）
4 ＊軍記と語り物（軍記物談話会）
5 言語と文芸（大塚国語国文学会）
6 ＊口承文芸研究（日本口承文芸学会）
7 ＊国学院雑誌（国学院大学）
8 ＊国語学（国語学会）
9 国語国文（京都大学文学部国語学国文学研究室）
10 国語国文研究（北海道大学国文学会）
11 国語と国文学（東京大学国語国文学会）
12 ＊国文（お茶の水女子大学国語国文学会）
13 ＊国文学（関西大学国文学会）
14 国文学：解釈と教材の研究（学燈社）
15 国文学解釈と鑑賞（至文堂）
16 国文学研究（早稲田大学国文学会）
17 ＊国文学攷（広島大学国語国文学会）
18 ＊古事記年報（古事記学会）
19 ＊古代文学（古代文学会）
20 ＊語文（大阪大学国文学研究室）
21 ＊語文（日本大学国文学会）
22 ＊語文研究（九州大学国語国文学会）
23 ＊上代文学（上代文学会）
24 女子大国文（京都女子大学国文学会）
25 ＊説話文学研究（説話文学会）
26 ＊中古文学（中古文学会）
27 ＊中世文学（中世文学会）
28 ＊名古屋大学国語国文（名古屋大学国語国文学会）
29 ＊日本演劇学会紀要（日本演劇学会）
30 ＊日本歌謡研究（日本歌謡学会）
31 ＊日本近代文学（日本近代文学会）
32 日本文学（日本文学協会）
33 ＊日本文学風土学会紀事（日本文学風土学会）
34 ＊表現研究（表現学会）
35 ＊仏教文学（仏教文学会）
36 文学（岩波書店）
37 ＊文学・語学（全国大学国語国文学会）
38 ＊文芸研究（日本文芸研究会）
39 平安文学研究（平安文学研究会）
40 ＊別冊国文学（学燈社）
41 ＊万葉（万葉学会）
42 ＊美夫君志（美夫君志会）
43 ＊むらさき：研究と教養（紫式部学会）
44 ＊立教大学日本文学（立教大学日本文学会）
45 ＊連歌俳諧研究（俳文学会）
46 ＊和歌文学研究（和歌文学会）

◆新指定貴重書

次の二点が新たに貴重書に指定されました。これにより貴重書は五十九点となりました。

●『薬師通夜物語』（刊）
●『鄒忠介公奏疏』（刊）

◆参考開架資料の排架位置

参考開架閲覧室の開架資料について、書架番号の変更と資料排架の移動・調整を行いました。

また、これにあわせて、個々の資料の排架位置を検索するためのトゥールとして、請求記号引きのリストを新しく備えました。どうぞご利用ください。

◆来館できない方のために——複写サービス

当館では、直接来館できない方にも複写サービスを行っております。申し込みの手続き、順序は次のとおりです。どうぞご利用ください。

①申込　複写資料の所蔵を確認のうえ、必要事項（氏名、住所、電話番号、複写資料名、請求記号、複写部分、複写方法、サイズ—紙焼写真の場合、等）を記入し、郵送でお申し込みください（閲覧係あて）。

②料金の納入　申込書により送料を含めた料金を算定し、「納入告知書」（請求書を兼ねた振込用紙）をお送りしますので、料金を最寄りの銀行に振り込んでください。

③複写物の送付　料金納入の確認後、複写物を送付します。

なお、大学等に所属している方は所属機関の図書館を通じて当館に申し込んでください。

当館資料の所蔵の確認は、次の所蔵目録をご覧になってください。

●マイクロ資料——『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』
●逐次刊行物——『国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録』
●図書（写本・版本）——『国文学研究資料館蔵和古書目録』

昭和五十八年度秋季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会　①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会　①〒一六〇新宿区北新宿三―一〇―一〇―五〇七

国語学会　①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付②一〇月二二～二三日③富山大学

古事記学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文化研究所第六研究室内

古代文学会　①〒一六七杉並区清水一―一―一―一一呉哲男方

上代文学会　①〒二三〇横浜市鶴見区鶴見二―一―三鶴見大学女子短期大学部国文科研究室内②一一月一二日③早稲田大学小野講堂

説話文学会　①〒一七〇豊島区西巣鴨三―二〇―一大正大学国文学研究室内②九月二四日③清泉女子大学

全国大学国語国文学会　①〒一〇二千代田区三番町二八―六グラン三番町四〇五号桜楓社気付②一〇月二二～二四日③愛知大学（豊橋校舎）

中古文学会　①〒四六三名古屋市守山区大森二二八二―二金城学院大学国文学研究室内②一〇月一五～一六日③二松学舎大学

中世文学会　①〒一〇二千代田区富士見二―一七―一法政大学能楽研究所内②一〇月二二～二四日③愛知大学（豊橋校舎）

日本演劇学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②一〇月一五日③同志社大学

日本歌謡学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内

日本近世文学会　①〒一〇一千代田区神田神保町三―二七共立女子大学日本文学研究室内②一一月二二～二三日③京都会館

日本近代文学会　①〒一七六練馬区豊玉上一―二六武蔵大学人文学部内②一〇月八～九日③新潟大学人文学部

日本口承文芸学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②一一月一九日③常葉学園女子短期大学

日本文学協会　①〒一七〇豊島区東池袋二―一九―二第二八千代マンション二〇二号②一〇月二九～三〇日③横浜市立大学

日本文学風土学会　①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内

日本文芸研究会　①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内

俳文学会　①〒一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部尾形研究室内②一一月五～七日③山口県立図書館

表現学会　①〒四八〇―一一愛知県愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内

仏教文学会　①〒一四一品川区大崎四―二―一六立正大学文学部国文学研究室内（東部）〒六〇三京都市北区紫野北花ノ坊町九六仏教大学高橋貞一研究室内（西部）

万葉学会　①〒五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内②一〇月九～一二日③岡山大学

美夫君志会　①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会　①〒一七一豊島区西池袋三―三四立教大学文学部日本文学研究室内②一〇月二九～三一日③宮城学院女子大学

＊　＊　＊

第七回国際日本文学研究集会　①〒一四二品川区豊町一―一六―一〇国文学研究資料館②一一月一一～一二日③国文学研究資料館

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第二十一号
昭和五十八年十月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一-一六-一〇
郵便番号一四二
電話(七八五)七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興